東南アジア研究　8巻4号　1971年3月

資料・研究ノート

# ビルマ国軍史（その3）

大　野　　徹*

# A History of the Burmese Army (Part 3)

by

Toru OHNO

## （2）国軍解体の危機

1948年1月4日のビルマ独立とともに，ビルマ軍に顧問として留まっていた英人将校が去った。[457] そして47年8月29日に調印されたボウ・レッヤー：フリーマン協定に基づく英軍事使節団にとって代えられた。[458] 新生ビルマ軍はこうして次第に英軍式に整備されていった。[459] ところが，この新しい軍隊は独立と同時に解体の危機にさらされる。危機は，赤旗，白旗両共産党の武装蜂起，アウンサンによってつくられた人民義勇軍の反乱，軍隊内部からの左翼系部隊の脱逃，カレン人の蜂起に呼応したカレン人部隊の寝返りなど，各方面から迫ってきた。

カンディー協定に基づく新軍の編成に際しては，選ばれない PBF 兵士のほうが多かった。彼らは，大半が郷里に帰って行った。しかし，職はなかった。[460] アウンサンはこうした元 PBF 兵士達の生活安定を図り，合わせて秩序の維持，復興などに役立たせるため，45年12月1日，「人民義勇軍」(People's Volantary Organization, 略称 PVO) を組織した。[461] PVO は次第に大きな組織となり，いつの間にか AFPFL の“私軍”のような存在になってきた。[462] 総本部はラングーンにおかれ，配下の司令部が各県に設けられた。やがて，全国各地の村落に下部組織ができあがった。PVO の構成は，今やまるで軍隊そっくりになってきた。[463] 彼らは

* 大阪外国語大学ビルマ語学科

457) Tinker, p. 322.
458) Cady, p. 567 : ビルマ語訳全文が Hla Myo, pp. 238–242 にある。
459) Tinker, p. 323.
460) Bo Than Daing, p. 513 ; Mg Mg (1969 b), p. 258.
461) Foucar, p. 192 ; Collis, p. 264 ; Cady, p. 519 ; Sein Tin, p. 198 ; Hla Myo, p. 226 ; Mg Mg (1958), p. 108 ; Mg Mg (1969 b), p. 271.
462) Donnison, p. 129 ; Trager, p. 70.
463) *Burma and the Insurrections*, p. 8.

軍服を着用し，新規応募者に軍事訓練をほどこした。[464] 帽章には PBF の孔雀印が用いられた。やがてその兵力は，10万を越える状態になった。[465] 確かに，PVO は第二次大戦の「落し子」である。指揮官クラスの中には，戦時中味わった栄光の再現を夢みる者もいた。[466] PBF の旧兵士からなるこの PVO の存在は，今や重大な問題となった。[467] 総督は PVO の解体を企て[468]，制服着用，軍事教練の禁止令を出した。[469] けれども，こうした措置は実効性をもたなかった。PVO の司令官はアウンサンであり，参謀部にはボウフムー・アウン，ボウ・ラヤウン，ボウ・ジンヨー，ボウ・ターヤーなど新軍に加わらなかった「志士30人」の一部が参画していた。ボウ・トウンリン，ボウ・テインダンなどミンガラードン士官学校の出身者も加わっていた。彼らは，いずれも実戦の経験をもつベテランばかりであった。

この頃，共産党に分裂の兆が現われた。共産党指導者の一人タキン・ソウは，日本軍が退いて連合軍が戻って来た時からすでに，「ビルマが独立するまでは闘争を継続する必要がある」ことを主張していた。[470] タキン・ソウに率いられる一派は，英国との妥協をいっさい拒否していた。彼らにとっては，帝国主義者に対しては人民戦争があるだけだった。[471] 一方，タキン・タントゥンに率いられる多数派は，AFPFL の組織内に留まってビルマの共産化を図ろうとしていた。[472] タキン・ソウは，46年2月に開かれた党大会で，タントゥンとテインペーを「帝国主義者と妥協する日和見主義者」と非難した。[473] けれども，ソウ一派は，しょせん少数派にすぎなかった。“トロッキスト”の烙印をおされたタキン・ソウ，タキン・ティンミャ[474]ら7人は，ビルマ共産党を脱退，新たに「赤旗共産党」を結成した。タントゥン，テインペーら多数派は，「白旗共産党」とよばれた。[475] 赤旗共産党は46年7月非合法化され，地下活動に転じる。[476]

一方，ビルマ独立がタキン・ヌおよび AFPFL を中心に着々と進められるに伴い，白旗共産党も不満を抱きはじめてきた。彼らは，ビルマ独立のイニシアチブをとるのは共産党だと自負していた。共産党は，AFPFL を公然と非難し始めた。[477] タントゥンは，アウンサンを日

464) Mg Mg (1961), p. 72.
465) Mg Mg (1969 b), p. 271.
466) *Burma and the Insurrections*, p. 7.
467) Cady, p. 519.
468) *Ibid.*, p. 521.
469) Collis, p. 264 ; Trager, p. 72.
470) Mg Mg (1961), p. 63.
471) Tinker, p. 20.
472) *Ibid.*, p. 20.
473) *Burma and the Insurrections*, p. 2 ; Cady, p. 527.
474) 47年赤旗脱党，49年白旗入党，60年逮捕，帰順．Thakin Tin Mya : *Myawaddy*, 1962. Aug., pp. 123-137.
475) Cady, p. 527 ; Tinker, p. 20 ; Trager, p. 97 ; Mg Mg (1969 b), p. 277.
476) Mg Mg (1958), p. 134 ; Cady, p. 527 ; Tinker, p. 20 ; Trager, p. 97.
477) Butwell, p. 50

和見主義者ときめつけ，総督の行政参事会に加わるのは裏切り行為だと言って攻撃した。46年9月26日結成された新行政参事会にタントゥンが選考から洩れた[478]ことも一因であった。10月10日，AFPFL は副総裁タキン・ヌの提案を受け入れ[479]，共産党の除名を決議した。[480] 1月以来 AFPFL の事務局長を務めてきた[481]タントゥンは，10月13日その職を追われた。[482] 英連邦諸国の中でははじめての共産党閣僚タキン・テインペーは，10月22日しぶしぶ閣僚を辞任した。[483] 共産党除名の波紋は，PVO にも影響をおよぼした。ボウ・テインダン（ミンガラードン士官学校1期生），ボウ・アウンミンの率いる共産系 PVO[484] の“赤軍”が，PVO から離脱した。[485]

47年7月19日，アウンサン，タキン・ミャ，ウー・バチョウなど行政参事会員7名が，ウー・ソーのテロに倒れた。[486] 事件直後現場にかけつけたアウンサンの専任副官ボウ・トゥンフラは，次のように語っている。[487]

「時計を見たところ，ちょうど10時35分になっていた。その時，将軍の部屋の方からドカン，ドカンというものすごい爆発音が起こったので，私とボウ・タンウィンは腹ばいになって身を伏せた。先程鳴り響いた爆破音にほんの少し遅れてダッダッダッという自動式機関銃の音が続けざまに聞こえてきた。その時になって，われわれは“しまった，大臣達が襲われた”と悟り，私は将軍達のいる会議室の方へ，ボウ・タンウィンは私の部屋の外へと即座にとび出した。将軍の部屋に通じる扉を開けた瞬間私が目撃した光景は，私にとって一生忘れられぬ無残なものであった。部屋中ひっそりと静まりかえっていてきな臭い硝煙が漂っており，先刻までビルマの将来を熱心に討議していた大臣達がゴロゴロ倒れていて見るに耐えない光景であった。最高幹部のアウンサン将軍は，腰かけていたテーブルの上座の方で哀れにも椅子と一緒に倒れ仰向けになっていた。床の上には35口径と45口径の銃弾の薬きょうが散らばっていた。加害者達と向き合う位置に坐っていたため，最初の銃撃から逃れ腹ばいになって辛うじて死の危険から免れたウー・バジャン，ピョーブェー・ウーミャ，ウー・アウンザンウェー各大臣と秘書官ウー・シュエボー達は，あたふたと隣室のウー・シュエボーの部屋へ逃げ込んでいた。」

加害者の一人コウ・トゥカ（事件当時犯人側の運転手，現在終身懲役刑服役中）は，次のように述べる。[488]

「4人が政庁の建物に入って行ってからしばらくして，パチパチパチパチという音が聞こえてきたので，やったなということが分かった。音はあまり大きくなかった。ドカンドカンというような音ではなかった。

478) Tinker, p. 21 ; Collis, p. 283.
479) Hla Myo, p. 367 ; Mg Soe Mg, p. 86, 115.
480) Mg Mg (1961), p. 128 ; Butwell, p. 50 ; Trager, p. 64, 77 ; Htin Aung (1967), p. 307.
481) Mg Mg (1961), p. 71.
482) Tinker, p. 22.
483) Mg Mg (1961), p. 128 ; タキン・ティンペーは現在ウー・ティンペーミインと名のり，国営新聞「ボウダタウン」紙編集長兼作家として活動している。
484) Bo Thein Swe, p. 199.
485) *Ibid.*, p. 199 ; Mg Mg (1969 b), p. 282 ; ボウ・ティンダンは後逮捕，帰順した。*Thuriya*, 1948.7.29.
486) Foucar, p. 201 ; Cady, p. 557 ; Collis, p. 289 ; Htin Aung (1965), p. 124 ; Han Tin, p. 109 ; Mg Mg (1958), p. 111 ; Mg Mg (1961), p. 84 ; Mg Mg (1968), pp. 57-58.
487) Bo Htun Hla, p. 89 ; 大野　徹 (1967), p. 50.
488) U Hla : *Htaung hnit lutha*, 1957.

よく葉の茂ったマンゴーの木に石ころを投げ，それをちょっと離れた所で聞いている程度の音であった。どうなったのだろう。彼らだけが射ったのだろうか，それともお互いに射ち合っているのだろうか，そう思っていると間もなく階段を彼らが小走りに駆け降りてきた。」

危機一発で死を免れた閣僚の一人ウー・バジャンは，次のように述べている。[489]

「犯人達が闖入して来た10時30分頃，閣僚会議の担当秘書官はウー・オンマウンであった。（中略）当日私が坐っていた席は，犯人達が入って来た扉と向い合せになっていた。守衛を突きとばし扉を押し開けて入って来た軍服姿の3，4人を見た瞬間，私は将軍のところへ緊急連絡に来たのだろうと思った。何という奴らだ，作法もろくにわきまえていない。閣僚会議の席へ来るというのに，銃を外に置くことさえしていない。今後こういうことはしないよう，将軍に注意してもらわねば，と思った。その瞬間，先頭の男がコの字型になった議場の入口から中にはいり込み，仁王立ちになったまま将軍めがけて発砲した。将軍は腕で防ぐようにして立ち上り，何事か叫んだ。しかし何と言ったのかよく分からなかった。犯人達が射ち続けていると，将軍は右後の机の方へとよろめき，机と机の間に倒れて事切れた。将軍が射たれている時，ウー・シュエボーとピョーブェー・ウーミャは，会議室の隣にあるウー・シュエボーの事務室に逃げ込んでいた。私は犯人達が発砲したのを見た途端床の上にうつ伏せになり，左隣に坐っていたウー・アウンザンウェーの手を引張って，二人共床の上に伏せたままになっていた。(中略) 犯人達は坐っている人だけを射った。ウー・アウンザンウェーと私は，横たわったままだったので，死んだとでも思ったのだろうかあまり射たなかった。」

同じく危うく助かったウー・アウンザンウェーは，次のように述べる。[490]

「銃声が止み犯人達が出て行って静まりかえった時，それまでうつ伏せになったままの私とウー・バジャンとは立ち上がって周囲を見回した。私が憶えている光景は，周囲40フィート位の会議室一面にまるで霧がかかったように硝煙がもうもうとたち込めており，床の上には弾が散乱していた。ボウ・アンチョー通りに向かってコの字型に並べられた机から少し離れた床の上に，アウンサン将軍が仰向けになって倒れていた。机の右側ではマインプン藩主のサオ・サントゥンが椅子に腰をかけ机の上に手をついて口を開けていたが，口からはドクドクと血があふれ出ていた。机の左側に席を占めていたタキン・ミャは，一番左端の机の下で仰向けになっていたが，死んでいるようだった。ウー・ラーザク，ディードウ・ウーバチョウ，ウー・バウィン，マン・バカインなどは，いずれも椅子の上に腰かけたまま首をうなだれひっそりとしていた。ウー・ラーザクとディードウ・ウーバチョウの二人はまだ絶命しておらず，かすかに息をしていた。」

暗殺に使われた銃は，M-3 という番号の入った自動小銃と軽機関銃である。この点についてボウ・ターヤーは次のように述べる。[491]

「対日抵抗戦に踏みきった後だった。われわれ第6管区のレーウェー郡に米軍機4機が飛来，落下傘で武器を投下してくれた。（中略） 届いたのは，とても軽くて役に立つ軽機関銃であった。M-3という番号がついていた。（中略）この間，アウンサン将軍ら民族指導者の暗殺に使われた武器を，写真で見た。小型機関銃だった。それは，われわれが対日抵抗戦当時使用したM-3 機関銃であった。（中略）歴史というものはむごいものだ。」

アウンサンの亡骸は病院に運ばれ，それからターワレインの自宅に送り届けられた。その模様をボウ・テインスエー（現在桑門に入り，アシン・タータナウィトウディと称す）は次のように述べる。[492]

489) U Ba Gyan : *Lanzin Thadin*, 1967.7.15 ; Mg Mg (1968), pp. 65-67.
490) U Aung Zan wai : *Lanzin Thadin*, 1967.7.15 ; Mg Mg (1968), p. 69.
491) Bo Taya : *Hanthawaddy*, 1969.3.27.
492) Bo Thein Swe (Ashin Thathana Withuddhi) : *Yangon*, 1963.7.19.

「1947年7月19日は曇りだった。当時ラングーン地区の PVO 指揮官をしていた私は，市内の治安状況をみるため10時半すぎにラウンウィッの本部を出た。スーレー・パゴダの近くまで来た時，ラングーン紙の記者コウ・チョーミインがバスを降りて大声で駆け寄ってきた。彼はハアハア言いながら，『ボウ・ティンスエー。将軍達が政庁内で射殺された。知ってますか』と言う。『本当か。では直ぐ病院へ行かなければ』私達は心配しながら病院へ駆けつけた。病院に着いた頃，一台の救急車が外来患者診察室の南側に来て止った。車内には，指導者達の見るも無残な死体があった。タキン・ミャ，マン・バカイン，ディードウ・ウーバチョウ，マインプン藩主などであった。ディドウ・ウーバチョウとマインプン藩主の二人はまだかすかに息をしていたので，直ぐ病院に運び込んだ。将軍の亡骸は，すでに病院の一室に安置してあった。ドー・キンチー，ボウ・レッヤーなどが帰って行った後，私達 PVO の者はボウフムー・アウンと一緒に死顔を見，本部へ帰って勢揃いした。そこへタキン・ヌがやって来て会議を開き，私に将軍の死体を洗浄すること，亡骸をターワレインの将軍宅へ送り届けること，国葬を行なうことなどを命じた。将軍の亡骸はターワレインの自宅で解剖され，内臓や脳漿などを取り出した後，また縫い合わされた。その後アルコールで拭き，アルコールに浸けられた。」

アウンサンらの死後，ランス総督は制憲議会議長タキン・ヌをよんで組閣を依頼した。[493] ピインマナーにいたネーウィンは，マウンマウン，イェートゥツらを引き連れ，急いでラングーンに戻って来た。ネーウィン，マウンマウン，イェートゥツら軍関係者とボウフムー・アウン，ボウ・セインフマンらの PVO，ウー・バスエー，ボウ・アウンヂーらの社会党代表とがラングーンの PVO 本部でタキン・ヌ，ボウ・レッヤーらと協議[494]，14名からなるタキン・ヌ内閣の誕生となった。[495]

PVO は，今や6万5千の人数をほこる巨大な組織になっていた。[496] アウンサンの死は，その PVO に大きな衝撃を与えた。PVO の統一はもっぱらアウンサンに依存していた。[497] それだけにアウンサンがいなくなれば，組織にひびが入って来る。アウンサンの死後，PVO はボウフムー・アウン，ボウ・ポウクン，ボウ・セインフマンなどによって統率されていた。[498] だがそれは，もはや単一の組織体ではあり得ず，内部に左右の対立をはらむ不安定な組織に変わっていた。

新生のタキン・ヌ内閣には，重大な脅威が迫っていた。それは，タキン・タントゥンの率いる白旗共産党からである。AFPFL から除名されてはいたものの，共産党は当時まだ合法政党であった。共産党は，47年10月17日に調印された「ヌ・アトリー協定」[499]に真向から反対した。[500] 彼らは，ヌ・アトリー協定を「帝国主義者への屈辱的な売り渡し」[501]であり，「偽の独

493) Collis, p. 289; Cady, p. 558; Mg Mg (1958), p. 112; Htin Aung (1965), pp. 124–125; Trager, p. 90; Han Tin, p. 109; Mg Soe Mg, p. 105.
494) Mg Soe Mg, p. 116; Mg Mg (1968), p. 83; Mg Mg (1969 b), p. 291; Mg Mg (1969 a), p. 192–3.
495) そのメンバーについては，Han Tin, p. 110.
496) Trager, p. 100.
497) Cady, p. 559; Mg Mg (1969 a), p. 198.
498) Mg Mg (1969 b), p. 300; Mg Mg (1969 a), p. 198.
499) 協定全文は，Mg Mg (1958), pp. 192–195 に；ビルマ語訳文は，Hla Myo, pp. 311–316 にある。
500) Cady, p. 572; Trager, p. 97.
501) Tinker, p. 26; Cady, p. 573.

立を受け入れた」[502]と言って非難した。非難の焦点は，協定の中の幾つかの条項（独立後における英軍事使節団のビルマ常駐，ビルマの海港および空港への英船，英航空機の乗り入れ，退役英人官吏への年金支給，接収された外国企業への補償など）にあった。[503] 共産党は協定には批判的だったが，憲法制定に加わりビルマの独立を歓迎した。[504] しかしこの党路線は，独立後直ぐに変わった。それは48年2月インドのカルカッタで開かれた東南アジア共産党会議の直後からである。この会議には，ビルマ共産党からもタキン・タントゥン，タキン・フラミャイン（ボウ・ヤンアウン），タキン・アウンヂー，タキン・バテインティンらが出席した。[505] 彼らは，帰国後いっそう攻撃的になり，「力による政府打倒」「AFPFLと政府指導者の一掃」[506]を主張しはじめた。共産党のこの「武装闘争路線」[507]は，党内に強い影響力をもつインド人ゴシャルの主張，「AFPFLは英帝国主義者の手先になり下がっている。われわれはAFPFLを打倒し，真の人民政権を樹立しなければならない」に基づいている。[508] この間の事情について，タキン・テインペーは次のように述べる。[509]

「1948年の独立直後，ゴシャルが帰って来た。ゴシャルが起草した政治路線は“内戦”路線であった。ビルマは，いまだ半植民地，半封建国のままだ。独立は偽りにすぎない。そして，この偽りの独立はAFPFLが資本主義者と結託した結果もたらされたというのが，彼の見解であった。」

ゴシャルの意見は，48年2月18日の党中央委員会で正式に採択された。[510] 武力による政府打倒のキャンペーンは，こうして大々的にくり広げられる。3月27日，ラングーンのバンドゥーラ公園で人民大会が開かれ[511]，タントゥンが出席した。タントゥンはAFPFLとPVOを非難し，武装蜂起をよびかけた。[512] 政府は直ちに逮捕令状を発した。翌28日午前2時，警察が共産党本部に踏み込んだ時，タントゥンとゴシャルはすでにピインマナーに飛んだ後だった。[513] そして，共産党の“武装革命”はすでに開始されていたのである。ウー・ヌは，その前後のいきさつを次のように語る。[514]

502) Mg Mg (1958), p. 134 ; Tinker, p. 26 ; Butwell, p. 96.
503) Mg Mg (1961), p. 128 ; Cady, p. 573 ; Mg Mg (1958), p. 134 ; Mg Mg (1969 a), p. 197.
504) Mg Mg (1961), p. 128 ; Trager, p. 97 ; 1947年の制憲議会選挙では党員7名を当選させている。Cady, p. 500.
505) Hla Myo, p. 369 ; ビルマ共産党の路線変更がコミンフォルムと何らかのつながりをもつらしいことは Trager, p. 97 ; Mg Mg (1958), p. 134 等にある。
506) Mg Mg (1958), p. 134 ; Butwell, p. 96.
507) Mg Mg (1961), p. 128.
508) *Burma and the Insurrections*, pp. 4-5 ; Tinker, p. 34 ; Mg Mg (1958), p. 135.
509) Thein Hpe Myint : *Bo Tahtaung*, 1968.10.1.
510) *Burma and the Insurrections*, p. 5 ; Tinker, p. 34 ; Mg Mg (1958), p. 134 ; Butwell, p. 96.
511) Cady, p. 583 ; Tinker, p. 35 ; Johnstone, p. 41.
512) Tinker, p. 35 ; Butwell, p. 97.
513) Cady, p. 583 ; Tinker, p. 35 ; Mg Mg (1958), p. 135 ; Butwell, p. 97 ; Mg Mg (1969 a), p. 202.
514) 1958年3月27日の第13回レジスタンス記念日におけるウー・ヌ演説。*Hanthawaddy*, 1958.3.28.

「1948年3月27日，私は共産党が地下活動に転じるとの知らせを受けて残念に思った。地下に潜る必要はない。不平や不満があれば私に言ってほしい。できるだけのことはするという呼びかけを行なった。私は共産党の代表に会おうと思って，ボウ・レッヤーを団長とする使節を出した。タントゥンは来なかった。話し合いたければ，そちらから出向いて来いと言うので，ボウ・レッヤーらをタントゥンの所に向かわせた。だが彼らは，会えずに引き返してきた。共産党が地下に潜ったのはその翌日，3月28日であった。」

共産党の武装蜂起は，PVO にも影響をおよぼさずにはおかなかった。PVO は2派に分裂した。この分裂は，直接的には タキン・ヌによって提案された14項目の左翼統一戦線結成と PVO の吸収に対する評価の違いに基づく。ヌ案支持の少数派は「黄色 PVO」とよばれ，批判的な多数派は「白色 PVO」とよばれた。[515] ボウ・ボウクン，ボウ・ラヤウン，ボウ・ポンチョー，ボウ・テインウィン，ボウ・トゥンリンらに率いられる白色 PVO は，6月26日地下活動に転じた。[516] ボウフムー・アウン，ボウ・セインフマン，ボウ・ミンガウン，ボウ・ポンミインらの黄色 PVO は，AFPFL に留まった。[517] 政府見解によれば，「白色 PVO は，タントゥンの策謀の犠牲になった」[518]のである。だが，共産党は PVO に対して冷淡だった。共産党は，彼らを「支持者のいない盲目的愛国者」[519]とこきおろしていた。ビルマ共産党上ビルマ本部はその宣伝文書「われわれはなぜ PVO と戦うか」の中で，次のように批判している。[520]

「悪魔ヌ政府，ファシスト政府，AFPFL 政府の弾圧に抗してビルマ共産党が武装蜂起してから，ちょうど1年たった。最近，ビルマ共産党の指導によって民主主義を愛する PVO，官吏，学生などが，政府の弾圧に反対して次々にたち上がっている。だが狡猾な AFPFL と社会党の悪漢共は，安寧の維持，選挙の勝利[521]という餌を目の前にぶら下げて，ポウクン，ラヤウン，ソーマウン，テインリンなど動揺している PVO の指導者達を，『平和使節団』という誤った道に導いてしまった。PVO の指導者は，闘争の中で流された血も忘れ，喜んで『一飯の義理』に報いた。これらの指導者は，下ビルマで流された PVO の新鮮な血を，ヌと共に美味しそうになめ始めている。PVO は，とうとうヌの手下になり下がってしまったのだ。(中略) PVO の諸君。われわれは2月と3月に君達の指導者ボウ・ラヤウンに，AFPFL と戦う PVO と共産党の統一戦線結成を提案した。だが革命に怖じ気づいたラヤウンは，社会党のウー・ウィンに脱帽していたずらに時を浪費し司令部を割ってしまった。彼は団結のよびかけをその足で踏みつぶしてしまったのだ。君達の指導者は，統一など望んでいない。われわれと団結する代わりに，ヌ政府に忠誠を誓い君達の血を売り渡している。君達に多くの血を流させているのは彼らなのだ。(中略) 真の革命的PVOよ，平和を希求し家族の生命を護り自由と民主主義を愛する PVO よ。来たれ！ われわれに加わり，ヌ政府を打倒しようではないか。人民を迫害するな。誤りは直ぐになおしたまえ。二心ある君達の指導者達を賊とばせ。AFPFL 政府を倒そう。われわれと共に民主統一戦線を結成しようではないか。われわれの革命成功のために。」

---

515) *Burma and the Insurrections*, p. 21 ; Foucar, p. 229 ; Cady, p. 587 ; Trager, p. 100-102 ; Mg Mg (1969 a), p. 204.
516) *Burma and the Insurrections*, p. 8 ; Han Tin, p. 120 ; Mg Mg (1969 b), p. 308 ; Cady, pp. 588-589 ; Foucar, p. 229 ; Desai, p. 280 ; Butwell, p. 101 ; Trager, p. 102 ; Mg Mg (1969 a), p. 204.
517) Bo Thein Swe, p. 211 ; Mg Mg (1969 b), p. 308.
518) *Burma and the Insurrections*, p. 7.
519) Butwell, p. 97 ; Mg Mg (1969 b), p. 300.
520) *Burma and the Insurrections*, pp. 46-47.
521) PVO は制憲議会で多数の議席を獲得している。Cady, p. 574.

48年10月，PVO は政府の和平使節ウー・トゥインを受け入れ，合意が成立したと述べて無条件降伏することになった。[522] ラングーン刑務所に収監されていた白色 PVO のボウ・テインウィン，テインリン，トゥンセイン，アウンニュン，ニュンマウンらは，獄中から平和声明を発表した。[523] けれども，PVO の反政府運動はこれで幕をおろしたわけではない。ボウ・ラヤウン，ソーマウン，ポンチョーらは1950年5月12月にも一たん帰順している[524]が，彼らがその戦術を武装闘争から議会闘争に転換したのは，1958年7月になってからである。[525]

独立直後のビルマの「国家保安評議会」は，スミス・ドゥン将軍，シーショウ将軍，チャードウ旅団長，ティントゥツ旅団長，トゥンフラアウン少将などによって構成されていた。[526] ティントゥツは，48年8月に編成された Union Auxiliary Force の総指揮官であり[527]，トゥンフラアウンは警察庁長官であった。[528] 彼らは右派とみられていた。左派の結集が図られた。ネーウィンの部下達は，ネーウィンに政権をとるよう働きかけた。[529] クーデター計画には，ボウ・テインダン，ボウ・アウンミンらの PVO 赤軍も同意した。社会党員の一部も賛成した。共産党の武力闘争路線に反対して，48年3月26日脱党した[530]ウー・テインペー（現在ウー・テインペーミインと名乗っている）にも働きかけが行なわれた。[531] ビルマ国軍の“革命”大隊が，8月10日ラングーンに集結してクーデターを起こすという噂が流れた。タイェッからはボウ・セインティンの率いる第1小銃大隊が参加する。途中，イェートゥッ中佐の率いる第3小銃大隊がこれに合流してラングーンに向かうというのであった。[532] けれども，北部軍管区司令官から参謀次長に昇進したばかりのネーウィン少将は，とうとうみこしを上げなかった。[533] 第1，第3大隊に呼応して，他の部隊も参加しようとしていたのだが，ネーウィンが動かなかったため各大隊の隊長もそのままになってしまった。[534] 計画はつぶれた。8月8日，第3大隊が地下活動に転じて行った。大隊長のボウ・イェートゥッは涙を流しながら隊と行動をともにした。[535] 同じ日，第5大隊の大隊長ボウ・ゼーヤも，単身地下に潜った。[536] 結局，1948年8月8日のこの“革命”に，実際に部隊単位で参加したのはミンガラードンに駐屯

522) *Burma and the Insurrections*, p. 48 ; Tinker, p. 38 ; Butwell, p. 101.
523) *Thuriya*, 1948.10.15 ; 1948.11.23.
524) Han Tin, p. 124 ; Trager, p. 114 ; Tinker, p. 48.
525) *Hanthawaddy*, 1958.8.12 ; *Yangon*, 1958.11.6 ; Johnstone, p. 125, 130.
526) Mg Mg (1969 b), p. 308.
527) Tinker, p. 323.
528) Mg Mg, (1969 b), p. 308.
529) *Ibid.*, p. 309 ; Mg Mg (1969 a), p. 205.
530) Hla Myo, p. 360 にその脱党声明が掲載されている。
531) Mg Mg (1969 b), p. 309.
532) *Ibid.*, p. 311.
533) *Ibid.*, p. 311 ; Tinker, p. 323 ; Mg Mg (1969 a), p. 205.
534) Mg Mg, (1969 a), p. 309.
535) *Ibid.*, p. 310.
536) *Hanthawaddy*, 1958.8.23.

していた第3大隊と，タイェッミョウに駐屯していた第1大隊の2個大隊だけであった。[537] プロームまで来て停止した第1大隊に，ボウ・イェートゥッの第3大隊が合流した。だが彼らは，今では“反乱軍”とよばれることになってしまった。[538] 反乱軍の兵力は，2個大隊合わせて，わずか2千名程度にすぎなかった。[539] そして，この反乱部隊は8月10日政府に忠実な軍隊の攻撃にあって四散する。[540] 第3大隊のボウ・ニュンマウン以下30名の兵士は投降したが[541]，“反乱指導者”の烙印をおされたボウ・ゼーヤとボウ・イェートゥッは，ビルマ共産党の中に飲み込まれてゆく。

赤旗，白旗両共産党，人民義勇軍（白色 PVO）などの蜂起，国軍2個大隊の反乱というビルマ国軍の屋台骨を大きくゆさぶった一連の事件に追い打ちをかけるような衝撃がきた。カレン族3個大隊が寝返りをうって反徒側に加わったのである。[542] カレン国の建国を要求するカレン人達は，すでに48年8月頃から不穏な動きを見せていたが[543]，翌49年1月にはインセインを皮切りに各地でその武装組織「KNDO」が蜂起した。カレン族3個大隊はそれに呼応したのである。ネーウィン将軍は，その時の窮状を次のように述べている。[544]

「BIA, BDA 系の兵士で編成された3個大隊の内，第3大隊が地下に転じた48～49年頃，軍の増強を図ろうとしても直ぐにはできなかったし，武器も満足になかった。（中略）空軍には Tigermoth や Chipmunk ぐらいしかなかったし，海軍にも ML が8隻か10隻あるだけだった。」

ラングーン陥落寸前まで追いつめられたウー・ヌは，2月1日残っていたカレン人部隊を武装解除し，カレン人将兵をすべて解職拘留した。[545] スミス・ドゥン，チャードウ，シーショウなどカレン人高級将校は依然として政府に忠実であったが，もはや彼らに軍の指揮権を任せてはおけなかった。参謀長の職は，ネーウィン中将が引き継いだ。[546] ネーウィン将軍はチョーソウ少佐（現大佐）の率いるピインマナーの第4大隊をデルタに送り込んだ。バテインではボウ・サンチー（現大佐），ボウ・ミンテイン（現大佐），ボウ・フラポン（現大佐）らが町の守備を指揮した。[547] KNDO のラングーン攻撃を防ぐため，ラングーン大学の構内に大砲3門がすえつけられた。ビルマ国軍にある大砲といえば，その3門だけであった。ボウ・イェートウ

537) *Ibid.* ; *Burma and the Insurrections*, p. 23 ; Cady, p. 589 ; Foucar, p. 229 ; Trager, p. 102.
538) Mg Mg (1969 b), p. 311 ; 数人の将校が軍隊を政党化しようとしたというのが政府見解である。*Burma and the Insurrections*, p. 9.
539) *Ibid.*, p. 312 ; *Burma and the Insurrections*, p. 23.
540) *Burma and the Insurrections*, p. 23 ; Cady, p. 589 ; Tinker, p. 37 ; Mg Mg (1969 a), p. 206.
541) *Myamma Alin*, 1950.8.31.
542) 大野　徹 (1970), p. 546.
543) *Ibid.* (I), p. 380.
544) 1968年9月21日に開かれた部隊長会議でのネーウィン演説。*Loktha Pyithu Nezin*, 1968.9.22 ; *Bo Tahtaung*, 1968.9.23.
545) Tinker, p. 324 ; Foucar, p. 235 ; Mg Mg (1969 b), p. 315 ; ビルマ軍は有能な指揮官を多数失う結果となった。Pye, p. 236.
546) *Thuriya*, 1949.2.2 ; Mg Mg (1961), p. 315 ; Tinker, p. 40 ; Foucar, p. 235 ; Johnstone, p. 50.
547) Mg Mg (1969 b), p. 315.

ン（現大佐）がそれを指揮した。[548] ボウ・イェートゥッが抜けた後の第3大隊は，有名無実であった。わずかしか残っていない兵士をチッミャイン少佐（現大使）が指揮していた。[549] ボウ・マウンチョー（現大佐），ボウ・セインミャ（現大佐），ボウ・ティンチョー（現大佐）の率いる3個中隊は，著しく兵力が不足しておりわずか180名ぐらいしかいなかった。[550] ネーウィン将軍は，他地区に散在している諸部隊をインセインの戦場に送った。アラカン地方で回教徒の非合法団体「ムジャヒッド」[551]と戦っていた第5大隊（チョーゾー大佐）は，飛行機でインセインへ送られた。ソーミイン少佐（後大佐，解職）が大隊副官をつとめ，その下でボウ・アウンペー（現大佐），ボウ・フラモー（現大使），ボウ・マウンルイン（現大佐）らが各中隊の指揮をとった。[552] マウービンでは，ボウ・タンセイン（現大佐），ボウ・オンペー（現中佐）らの第4大隊が KNDO に包囲されていた。[553] 対 KNDO 戦には，以上のほかバンクール少佐（現大佐）の率いるチン族第1大隊，セインウィン少佐（現準将）の率いるビルマ連隊第4大隊，ボウ・チーテイン（現大佐）の率いる第5大隊の残りの中隊，アウンヂー大佐の BTS 第1大隊，ブレーク大佐（後準将，退役）の指揮する Burma Auxiliary Force などが参加した。[554] チョーゾー大佐（後準将，解任）が参謀長として前線の指揮をとった。[555] チーマウン少佐（後大佐，解任）が参謀であった。カレン族の“内乱”は，指導者ソー・バウーヂーの死によって下火になる。バウーヂーは，エーマウン中佐（現大佐），セインルイン少佐（現大佐）らの率いるビルマ連隊第3大隊の攻撃にあって，1951年8月射殺された。[556] 49年4月1日国防相，内相，兼副首相に任命された[557]ネーウィン将軍は，翌50年9月8日，辞任して軍隊に戻った。[558]

カレン族の“内乱”を契機に，ビルマ国軍の戦闘力が強化された。49年2月から4月にかけて行なわれたイギリスおよびインドからの武器援助によって，新しい大隊が増設された。カチン族がその中心になった。カチン・ライフル銃隊は，3個大隊から6個大隊にふやされた。シ

548) *Ibid.*, p. 317.
549) *Ibid.*, p. 319.
550) *Ibid.*, p. 319.
551) イスラム州の設立を要求する回教徒の政治組織。45年にはすでに活動を開始している。最盛時には，党員2万を数えた。アーメド・フセイン，アブドゥル・カセムなどがその指導者。党員はインド系住民のローヒンヂャー族。1960年から61年にかけて帰順した。 *Htoon Nezin*, 1945.11.23 ; *Myamma Alin*, 1954.11.28, 1961.11.16 ; *Mandaing*, 1961.7.6 ; *Myawaddy*, 1961 Aug, pp. 217–226.
552) Mg Mg (1969 b), p. 321.
553) *Ibid.*, p. 324.
554) *Ibid.*, p. 321.
555) *Ibid.*, p. 322 ; チョーゾーは1956年9月首相命によって解任された。*Myamma Alin*, 1957.5.27. 原因は共産党への通謀である。*Thissa Nezin*, 1957.8.15. ちなみにチョーゾーは1944年当時ビルマ共産党中央委員会員の一人であった。Tin Mya, *Myawaddy*, 1970 Jan., p. 174.
556) 大野　徹 (1970), pp. 555–558.
557) Mg Mg, (1969 b), p. 328.
558) *Ibid.*, p. 337.

ャン・ライフル銃隊3個大隊，カヤー・ライフル銃1個大隊も新設された。[559] 1949年2月には6個大隊しかなかったビルマ国軍も，1952年1月には9個大隊となり，翌53年には41個大隊にふえた。[560] これはもっぱら，非正規軍の正規軍編入によって達成された。

50個大隊もの軍隊を維持する最大の難関は，将校の確保であった。将校は49年から50年にかけて大量に任命された。[561] 中隊長は大隊長に昇進した。[562] 部隊長および高級将校としての訓練を受けるため，マラヤ，香港，オーストラリア，ニュージーランドなど，外国に派遣される者もあった。[563]

1955年，シャン州ヤッサウ町の近くに士官学校が開設された。[564] 生徒はそこで4年間教育と訓練を受け，大学卒と同じ資格が与えられた。[565] ただし卒業後は尉官に任命され，最低5～10年間は軍務に服することが義務づけられた。[566]

（3） 政治に手を染めた軍隊

1958年1月29日から4日間，ラングーンで AFPFL 第3回全国大会が開催された。[567] 大会準備委員を務めた副首相ウー・バスエーは，開会演説の中で，「分裂を策謀する者は，いかに親しかろうと，たとえ親友であろうと，断固これをやっつける」と述べて[568]，AFPFL 内部に分裂の徴候があることを明らかにした。AFPFL の分裂は，同年4月頃から目立つようになった。[569] それは，ウー・ヌ（首相），タキン・ティン（農相）派と，ウー・バスエー（副首相），ウー・チョーニェイン（工業相）派の対立であった。[570] 各地で両派の衝突が続発[571]，ウー・ヌ内閣は激しい非難にさらされるようになった。[572] 6月3日“スエー・ニェイン”派の閣僚15名と次官22名が辞任した。[573] 同月22日“スエー・ニェイン”派 AFPFL の中央執行委員会が開かれ，ウー・ヌおよび“ヌ・ティン”派の党員が除名された。[574] 席上，ウー・バシュエレーは，「ウー・ヌは，アウンサンの死によって偶然 AFPFL の総裁になっただけだ。

559) Tinker, p. 325；少数民族部隊の現在の編成については本稿P.562参照。
560) *Ibid.*, p. 326-327；ビルマの軍隊は，1949年から50年にかけて強化されている。Pye, p. 236.
561) Tinker, p. 328.
562) Mg Mg (1969 b), p. 325.
563) *Ibid.*, p. 325；Tinker, p. 327.
564) *Myamma Alin*, 1955.2.9；1955.2.17；Mg Mg (1969 b), p. 346.
565) *Myamma Alin*, 1955.2.9.
566) *Myamma Alin*, 1955.2.11.
567) Donnison, p. 156.
568) ウー・バスエー演説の全文は *Yangon*, 1958.2.1 にある。
569) Trager, p. 174.
570) Mg Mg (1961), p. 211；Desai, p. 291；Butwell, p. 198；Htin Aung (1967), p. 322；Johnstone, p. 120；矢野，p. 444.
571) Johnstone, p. 130.
572) Desai, p. 291.
573) Hla Myo, p. 134；Donnison, p. 157.
574) *Hanthawaddy*, 1958.6.23.

AFPFL 分裂の被告第1号はウー・ヌである」と言って非難した。“ヌ・ティン”派は，6月9日に上程された下院の不信任案を 127 対 119 で退けた[575]が，クーデターの心配を感じていた。一方“スエー・ニェイン”派は政府の弾圧，暗殺を恐れた。[576] しかし軍は動揺しなかった。[577] ネーウィン将軍の下，固く団結していた。[578] 彼らは，政治とは程遠い存在であった。[579] 政治的紛争への介入よりも，まず共産党その他の反政府組織との戦闘に精力を注いでいた。[580]

AFPFL の分裂は，第1回選挙が終わった1950年頃から始まった。分裂は，第2回選挙が終わった1956年，いっそうその速度を早めた。[581] そして1958年，独立以来一貫して政権を担当してきた AFPFL は，ついに“ヌ・ティン”（または清廉）派 AFPFL と“スエー・ニェイン”（または安定）派 AFPFL に分裂してしまった。[582] 当然，軍内部にも波紋が広がってきた。軍は，「法を遵守する。憲法に従って合法的に成立した政府に従う。政争には関与しない」との方針をとった。[583] ところが8月31日“清廉”派 AFPFL の大会が開かれ，軍に“公敵第1号”のレッテルがはられた。[584] 一方，軍の高級幹部連は，ウー・ヌが合法「左翼」の協力を得て議会の運営を行なっている[585]のみならず，反徒の共産党に和睦の提案までしている[586]ことを知って，大いに驚いた。[587] ネーウィン大将，ティンペー準将，アウンヂー，マウンマウン，アウンシュエ，テインマウンらの諸大佐は，社会党の指導者ウー・バスエー，ウー・チョーニェインに党の結束を促した。[588] こうした軍の動きに対し，清廉派 AFPFL は準軍隊組織の Union Military Police を活用した。UMP は，清廉派ボウ・ミンガウンの指揮下にあった。彼は，マンダレーの UMP をラングーンに移動させようとしたのである。[589]

9月22日，ボウ・ミンガウンはウー・ヌに面会して軍がクーデターを起こすという情報を確かな筋から得たと告げた。ウー・ヌはネーウィンに連絡をとろうとしたが，ネーウィンはパーティーに出席していていなかった。[590] 翌日ウー・ヌは，マウンマウン大佐に会った。ネーウィン将軍暗殺の噂，政府による国軍の解散，帰順した PVO（人民同志党）による正規軍編成

575) Tinker, p. 62 ; Trager, p. 175 ; Johnstone, p. 123.
576) Mg Mg (1961), p. 212.
577) Butwell, p. 203 ; Pye, p. 231.
578) Mg Mg (1961), p. 212 ; Mg Mg (1969 b), p. 344 ; Htin Aung (1967), p. 325.
579) Donnison, p. 157 ; ただし，高級将校の大半は「スエー・ニェイン派」びいきであった。Pye, p. 248.
580) Desai, p. 291 ; Johnstone, p. 127.
581) Mg Mg (1969 b), p. 351.
582) 分裂の経過については，矢野　暢『タイ・ビルマ現代政治史研究』が詳しい。
583) Trager, p. 178 ; Mg Mg (1969 b), p. 361 ; Mg Mg (1969 a), p. 242.
584) Butwell, p. 203.
585) NUF がヌ・ティン派を支持した。Johnstone, p. 211.
586) Butwell, p. 201, Trager, p. 178 ; Pye, p. 239.
587) Desai, p. 291.
588) Mg Mg (1969 b), p. 352 ; Mg Mg (1969a), p. 235.
589) Butwell, p. 204 ; Johnstone, p. 134.
590) Butwell, p. 204.

などの噂があるため，全部隊が警戒体制に入っているとマウンマウンは語った。[591] 24日，マウンマウン，アウンヂーの両大佐がウー・ヌと会談，ネーウィン暫定政権設立について合意が成立した。[592] 9月26日，ラングーンの町は軍隊に包囲された。そして軍隊は，その外側をUMPに包囲されていた。[593]

こうした緊迫した状態の中で，ウー・ヌとネーウィンの間では書簡のやり取りが行なわれた。ウー・ヌは，(1)清廉派AFPFLは，ネーウィン将軍が首相となって新内閣を組織し，1959年4月末日までに自由にして公正な選挙を実施するための準備をととのえてくれることを強く要望している。(2)ネーウィン将軍が首相を引き受けるというのであれば，憲法第57条に基づいて10月28日上下両院の開会を行なうよう大統領に勧告し，開会当日私は首相の職を退き，ネーウィン将軍を首相に選出するよう議会に提案する。(3)ネーウィン内閣には，清廉派AFPFLの党員を含める必要はない。(4)公正にして自由な選挙が実現できるよう，公務員および軍人を政治に介入させないよう配慮してほしい。(5)軍隊は規律ある組織として，不当な圧迫，迫害，弾圧などを行なわぬよう取り締まってほしい。(6)暴行，強奪，強盗，誘拐，殺人等の犯罪には強力な取締りを望む。(7)国民は治安の安定を望んでいる。ネーウィン政府が，この国内和平の実現に成功することを願う。(8)外交面における積極中立政策の推進を切望する，と要望した。[594]

これに対しネーウィンは，(1)重大な職務をになうことにためらいを感じるが，首相が望むのであれば国家のため最善を尽す覚悟である。(2)下院から首相に選出されれば，1959年4月末までに自由かつ公正な選挙ができるよう，必要な措置をとることを約束する。(3)新内閣の閣僚にはいかなる政党代表も加えないことを約束する。(4)公務員・軍人の政治介入を禁止する。(5)軍人の不法行為には特に気を配る。(6)犯罪の抑制に努力する。(7)国内和平実現のため努力する。(8)新内閣は積極中立政策を推進する，と回答した。[595]

こうした約束が成立した後，ウー・ヌはラジオを通じて国民に声明を出した。[596] すなわち事態の収拾，法と秩序の回復，自由な選挙の実施のため[597]，中立派のネーウィン将軍に出馬を要請[598]，管理内閣の組閣を依頼したというのである。10月28日議会が開かれ[599]，ウー・ヌの報告を受けた[600]議会は，ネーウィンの出馬を了承した。[601] ネーウィン将軍はしぶしぶなが

591) *Ibid.*, p. 205.
592) *Ibid.*, p. 206.
593) *Ibid.*, p. 205.
594) 全文が，Hla Myo, pp. 443-444 に，英訳文は，*Is Trust Vindicated?*, pp. 543-544 にある。
595) Hla Myo, p. 445 ; *Is Trust Vindicated?*, p. 544.
596) Johnstone, p. 135 ; Hla Myo, p. 443 ; *Is Trust Vindicated?*, p. 542.
597) Mg Mg (1961), p. 212 ; Donnison, p. 157 ; Htin Aung (1967), p. 326.
598) Donnison, p. 157.
599) *Ibid.*, p. 157.
600) Trager, p. 180.
601) Mg Mg (1969 b), p. 368.

らも引き受け[602]，政治家を含まない[603]内閣を組織した。[604] それは，州務相を除いてわずか9人の内閣であった。[605] 州務相を含めても閣僚の数は13人にすぎなかった。[606]

当時，軍の指導者は次のような人達によって構成されていた。[607] ネーウィン大将，ティンペー準将，タンペー準将，クリフト準将，マウンマウン大佐，アウンヂー大佐，チーマウン大佐，チッキン大佐，キンニョウ大佐，チーウィン大佐，エーマウン中佐，ウィン中佐。しかしネーウィンは，これらの高級将校を閣僚には加えなかった。[608] 軍人には，もっぱら物価の安定と当時著しく悪化していた治安の回復に専念させた。このように，ネーウィンは軍人を表面には出さなかったけれども，重要な政策はもっぱら参謀会議で決定した。ネーウィン内閣の意志決定機関は“閣議”ではなく，アウンヂー，マウンマウンらによって構成される“参謀会議”だったのである。しかもアウンヂー，マウンマウン，ティンペーなどの高級将校は，政府の経済諮問委員会のメンバーでもあった。[609] ネーウィン管理内閣の機構と運営とは，日本軍政時代のそれにきわめてよく似ている。[610] 日本がビルマを統治していた頃，国政には直接手を出さなかった。上部から下部に至るまで，行政機構はすべてビルマ人官吏の手中にあった。だが日本軍司令官には，責任あるビルマ人官吏を監視し制御し得る将校がいた。当時，ビルマ人官吏は，日本人の承諾を得なければ何もできなかった。ネーウィン政府は同じやり方を踏襲した。[611] あらゆる行政組織に軍人が送りこまれた。[612] その組織と配置将校との関係は次のとおり。[613]

中央保安評議会—マウンマウン大佐（現駐クメール，ラオス大使），バタン大佐，チーハン中佐

連邦軍警察部隊—ミンテイン大佐，タンユサイン大佐

陸水運輸庁—チョーソウ大佐（現革命評議会員）

鉄道局—キンニョウ大佐（65年退役）

ビルマ航空—クリフト準将（63年解任，タイ国へ亡命）

電信庁—バニー大佐（現駐イスラエル大使）

国民登録局—チッミャイン大佐（現駐デンマーク，スエーデン，ノルウエー大使）

602) Butwell, p. 207 ; Mg Mg (1961), p. 212.
603) *Hanthawaddy*, 1958.10.15 ; Johnstone, p. 140.
604) *Yangon*, 1958.11.1 ; Trager, p. 180.
605) Mg Mg (1969 b), p. 372.
606) 従来は閣僚が30人もいた。Trager, p. 181.
607) Trager, p. 133；これらの高級将校には政党政治家と密接な関係をもっている者が多い。Pye, p. 234.
608) もっとも，後，内閣を一部改造して，ティンペー準将と国防省軍需局長ウー・ティーハンの両名を閣僚に加えた。Mg Mg (1961), p. 213 ; Mg Mg (1969 b), p. 380 ; Mg Mg (1969 a), p. 260.
609) Butwell, p. 212.
610) Johnstone, p. 141.
611) Desai, p. 293.
612) Donnison, p. 158 ; Trager, p. 182 ; Mg Mg (1961), p. 213 ; Pye, p. 245.
613) Trager, pp. 397-398 ; Mg Mg (1969 b), pp. 373-376 ; Mg Mg (1969 a), pp. 253-256.

測　量　庁—フラアウン中佐（現大佐）
経済系官庁—アウンヂー大佐（後準将，63年解任）
農地開発庁—チーウィン大佐（後退役）
林　野　庁—チーマウン大佐（後解任）
燃　料　庁—ミャウィン大佐（後死亡）
農産物販売庁—ミャタウン中佐（現バトゥー下士官学校長）
港　湾　局—ソーミャテイン中佐（現陸水運輸庁長官）
ビルマ製薬業—バーバー大佐，フラハン大佐（現革命評議会員）
工業開発公社—エーチョウ中佐
労　働　局—チッカイン中佐（現労働省局長）
ラングーン市長—トゥンセイン大佐（後駐日大使館武官，64年死亡）

ネーウィン内閣の主要な役割は，法と秩序の回復と6か月以内の総選挙実施の二つであった。[614] だがそれは，予定期間の6か月では無理であった。それにネーウィンは国会議員ではなかった。議会は憲法を一部修正して期間の延長を認め[615]，ネーウィンは1960年の4月選挙まで首相の座にとどまった。[616] この間，ネーウィンは様々な方面で成果を挙げた。ラングーンの過密住宅街の解消，衛星都市の建設，物価引下げ，治安の安定，公務員の綱紀粛正等々。[617] 人々はネーウィン将軍に感謝し軍政の延長を望んだ。[618] だがこれらの事柄は，すべて軍隊をバックに行なわれたのである。[619]

（4）政権を掌握した軍隊

独立後3回目の総選挙の内，下院議員の選挙は1960年2月6日，上院議員の選挙は同月9日に行なわれた。[620] ネーウィン暫定内閣は，明らかに反ウー・ヌ的であった。[621] 高級将校の多くはヌの復帰を望んでいなかった。しかしネーウィン将軍は，58年10月31日の施政方針演説で言明した[622]ように，軍の中立性を堅持した。[623] 選挙はウー・ヌの圧倒的勝利に終わった。[624]

614) 9月30日付のネーウィン談話。*Hanthawaddy*, 1958.9.30.
615) Johnstone, p. 140 ; Donnison, p. 157.
616) Desai, p. 293 ; Trager, p. 185.
617) Mg Mg (1961), p. 214 ; Trager, pp. 183-184 ; Butwell, pp. 209-210 ; Donnison, p. 159.
618) Desai, p. 295 ; もっとも理想とは異なり，現実の政治は厄介であった。高級将校は若手将校から批判されだした。Pye, p. 232.
619) Johnstone, p. 141.
620) Mg Mg (1961), p. 215.
621) Butwell, p. 212 ; そのためウー・ヌ復帰後，軍管区司令官の準将2名，旅団長の大佐9名が解任されている。Mandaing, 1961.2.7.
622) Yangon, 1958.11.3.
623) Mg Mg (1969 b), p. 399 ; Mg Mg (1969 a), p. 275.
624) Desai, p. 295 ; Htin Aung (1967), p. 326.

下院では，安定派がわずかに34議席しか確保できなかったのに対し，清廉派は156議席も獲得した。[625] 安定派の指導者ウー・バスエーも，ウー・チョーニェインも，ともに落選した。[626] 56年の総選挙では47議席も獲得した左翼のNUFも[627] 今回はほとんど姿を消してしまった。[628] 高級将校に敬遠されていたウー・ヌが，ふたたび政権の座に返り咲いたのである。[629]

1960年3月16日に再登場したウー・ヌ内閣[630]は，選挙スローガンの実現に取り組んだ。モン，アラカン両州設立[631]の予備段階として，61年4月および5月にモン州務相，アラカン州務相が任命され[632]，非仏教徒の間から強い反対があった[633]にもかかわらず憲法が改正されて61年8月17日仏教の国教化が断行された。[634] ウー・ヌの意見は，ある面ではこうして貫徹されたものの，政治的には相変わらず不安定な状態が続いた。反徒の活動は，以前にもまして活発になった。少数民族との融和，団結も課題であった。チン族やモン族の間からは「州」設立の要求が高まってきた。北ではカチン族が蜂起した。[635] 彼らは「カチン独立軍」(KIA) と名乗り，カチン族の自由と独立を要求してきた。[636] 南部では，カレン族の反政府組織KNDOが活動を強化した。彼らの地盤は，デルタ地帯とテナセリム地方であった。[637]

これら少数民族の中で最も尖鋭なのは，シャン族であった。[638] シャン州は従来33の“藩”で構成され，各藩とも「ソーブワー」とよばれる藩主（または土侯）の統治下にあった。[639] 独立後，ソーブワー達はその統治権をビルマ政府に譲渡するよう要求されていた。ソーブワーの“版籍奉還”は52年10月26日に予定されていた[640]がずるずると引き延ばされ，実現したのはネーウィン管理内閣下の59年4月24日になってからである。[641] この“版籍奉還”によってソーブワー達は行政，司法，租税等の世襲的特権を喪失した。それまでの33藩は解体され，新

625) Tinker, p. 92; Donnison, p. 160.
626) Trager, p. 187 ; Butwell, p. 222 ; Tinker, p. 62.
627) Butwell, p. 223.
628) Mg Mg (1961), p. 195 ; Trager, p. 195.
629) Desai, p. 295 ; Htin Aung (1967), p. 326. 脚注621）の高級将校解任は，ウー・ヌの“報復人事”とみてよい。
630) Han Tin, pp. 140-142 ; Butwell, p. 224.
631) *Bama Khit*, 1958.10.26 ; *Yangon*, 1958.11.2 ; *Thamadi* ; 1960.7.27.
632) :*Myamma Alin*, 1961.4.5.
633) *Mandaing*, 1961.8.2 ; *Myamma Alin*, 1961.8.18.
634) *Mandaing*, 1961.8.24; *Myamma Alin*, 1961.8.18; Butwell, pp. 224-225; Donnison, p. 161; Mg Mg (1969 a), p. 289; 上下両院の合同議会は，“仏教国教化”憲法修正案を賛成324，反対47で可決している。
635) *Myamma Alin*, 1961.8.20 ; Butwell, p. 227.
636) 大野　徹 (1969 a), p. 111.
637) *Yangon*, 1958.11.6.
638) Butwell, p. 226.
639) 1969年 BSPP 第4回大会におけるネーウィン演説，*Loktha Pyithu*, 1969.11.12.
640) *Hanthawaddy*, 1955.6.4 ; *Myamma Alin*, 1952.11.11.
641) *Yangon*, 1959.2.2, 1959.2.4 ; Donnison, p. 159 ; Mg Mg (1969 a), p. 264.

たに7県の行政単位に改編された。[642] シャン州に内在していた封建的社会制度はこうして破壊されたが，危機は新たな方面から迫ってきた。それは，シャン州のビルマ連邦離脱問題である。シャン州は，独立後10年目に連邦内に留まるか分離するかについて討議する権限を，ビルマ憲法によって認められていた。[643] この離脱問題は1957年になって急速に燃え上がった。[644] ビルマ連邦からのシャン州離脱の声は，特にソーブワーの間で強く[645]，“大統領”を互選し，“シャン共和国”を建国せよという声まであった。[646] シャン州の離脱問題は，60年のウー・ヌ新内閣の登場とともに「真の連邦制度実施」という形で再燃する。シャン州選出の上院議員[647]の間から連邦国家実現を要求する声が高まり[648]，61年2月25日にはシャン州議会が憲法修正案の国会提出を決議するところまで発展した。修正案の骨子は次のとおりである。[649]

(1) 「ビルマ州」の新設

(2) 各州に対する上院議席の平等な割当て

(3) 外交，国防，財政，司法，運輸通信等を除く統治権の各州への譲渡

(4) 上下両院の権限の平等化

この“連邦国家”実現を要求してビルマ政府に武器をとるシャン人が増大した。[650] シャン族の指導者達は，またもやビルマ連邦からのシャン州脱退を口にしはじめた。[651] ところがビルマ軍は容赦しなかった。武装反政府組織を掃討するのは，軍の任務であった。軍は戦闘機5機を使って，北部シャン州ラーショウ県内のシャン族反徒7百名に機銃掃射をあびせて潰走させた。[652] 61年8月にも連続的に討伐作戦を展開した。[653] ビルマ政府も，“連邦国家”案を強行すればシャン州への交付金を停止する[654]と言って圧力を加えた。ところが，ウー・ヌはシャン族に好意的だった。7月11日の記者会見で，ウー・ヌは次のように述べている。[655]

「シャン案はシャン州政府が勝手に作ったのではなく，憲法改正について意見があれば遠慮なく申し出てほしいというビルマ政府の要望に基づいて作成されたものだ。その点を認識する必要がある。彼らは民主主義的権利を行使しているだけだ。われわれがそれに腹を立てる理由はない。」

642) *Yangon*, 1958.1.5.
643) 大野　徹 (1964), pp. 80-81.
644) *Mandaing*, 1961.7.14 ; *Myamma Alin*, 1957.8.3, 1958.8.13.
645) *Myamma Alin*, 1957.8.14.
646) *Hanthawaddy*, 1958.10.20.
647) シャン族のソーブワーは自動的に上院議員になることが認められている。ビルマ憲法第154条第2項。
648) Butwell, pp. 226-227 ; Trager, p. 197 ; Donnison, p. 161.
649) Hla Myo, pp. 448-449.
650) Butwell, p. 227 ; Trager, p. 195.
651) Butwell, p. 240.
652) *Myamma Alin*, 1959.11.29.
653) *Myamma Alin*, 1961.8.15, 1961.8.18.
654) *Mandaing*, 1961.7.1.
655) *Ibid.*, 1961.7.12.

軍はウー・ヌのこうした態度に少なからず驚いた。[656]

危機は別な面からも迫ってきた。それは与党の「連邦党」内における派閥争いである。連邦党内部には，1960年2月選挙の直後からタキン派とウー・ボウ派との対立が生じていた。[657] タキン派にはタキン・ティン，タキン・チョートゥン，タキン・パンミャインなどが属し，ウー・ボウ派にはウー・ウィン，ボウ・ミンガウン，ボウフムー・アウン，ボウフムー・バラなどがいた。[658] 両派の対立は激化の一途をたどったが，62年1月27日の党大会でタキン派が勝利を制した。[659]

ビルマ連邦の危機はもう一つあった。それはシャン州北部にいる残存国府軍である。1949年末[660]から50年にかけて雲南省からビルマに侵入して来た[661]国府第8軍の2個師団[662]（兵力1万2千）[663]は，53年3月ビルマ政府が国連に提訴した[664]ことによって約6千名が台湾に送還された[665]が，それでもまだ7千人程度残留していた。[666] 彼らはシャン州北部から東部にかけて勢力を伸ばし，ビルマ政府の頭痛の種となっていた。軍は61年1月に「メコン作戦」とよばれる大規模な掃討作戦を展開し，シャン州内の国府軍飛行場や司令部を占領した。[667] 同年2月17日中国人の乗り組んだ米国製爆撃機B-24が射ち落とされ[668]，ラングーンでは1万人の抗議デモ隊がアメリカ大使館に押し寄せる反米デモにまで発展した。[669] 軍はシャン州内の残存国府軍がアメリカの後押しで中共に反攻しようとする動きを見せていることを憂慮した。[670]

そして1962年3月2日，兵士を満載した戦車，自動車がプローム通りをラングーンに向かった。[671] 午前2時，大臣官邸のあるウィンダーミーア地区が包囲された。[672] 首相ウー・ヌ，大統領マン・ウィンマウン，上院議長サオ・クンチー，下院議長マン・バサインおよび連邦党の閣僚，シャン州選出の上院議員サオ・シュエタイなど46人が逮捕された。[673] 午前5時，ミン

656) Donnison, p. 162.
657) *Myamma Alin*, 1961.11.16 ; Trager, p. 192 ; Butwell, p. 232 ; Johnstone, p. 155 ; Htin Aung (1967), p. 326.
658) Butwell, p. 233.
659) Trager, p. 197 ; Butwell, p. 239.
660) Bo Kyaw Zaw, p. 206 ; *Thuriya*, 1953.2.26.
661) Trager, p. 114 ; Donnison, p. 146.
662) *Kuomintang Aggression in Burma*, pp. 3-5.
663) *Ibid.*, p. 5 ; Mg Mg (1969 a), p. 228 ; Butwell, p. 182 ; Donnison, p. 146.
664) *Kuomintang Aggression in Burma*, pp. 23-24.
665) Mg Mg (1958), p. 152 ; Butwell, p. 183.
666) *Mandaing*, 1961.4.21 ; *Myamma Alin*, 1955.3.16, 1958.10.19 ; *Hanthawaddy*, 1958.3.6.
667) *Mandaing*, 1961.2.7 ; *Loktha Pyithu*, 1968.3.25.
668) 毎日新聞，1961.2.18.
669) 朝日新聞，1961.2.22 ; Butwell, p. 230 ; Trager, p. 196.
670) Donnison, p. 162.
671) *Ibid.*, p. 163 ; Htin Aung (1967), p. 327.
672) Than Hpe Myint, p. 1.
673) *Ibid.*, p. 1, 3, 4 ; Han Tin, p. 142 ; Donnison, p. 163 ; Trager, p. 198 ; Mg Mg (1969 b), p. 424.

ガラードン空港が閉鎖された。[674] ビルマにクーデターが発生したのである。[675] 58年の時とは違い，今度は軍自身のイニシアチブによるものであった。[676]

革命評議会布告第1号によって，ネーウィン将軍を議長とする「革命評議会」が結成された旨明らかにされた。[677] 会員はいずれも高級将校で[678]，次のような顔ぶれから成っていた。[679]

ネーウィン大将，アウンヂー準将（陸軍参謀次長），タンペー準将（海軍参謀次長），クリフト準将（空軍参謀次長），ティンペー準将，サンユ準将，セインウィン準将，タウンチー大佐，チーマウン大佐，マウンシュエ大佐，タンセイン大佐，チョーソウ大佐，ソーミイン大佐，チッミャイン大佐，キンニョウ大佐，タンユサイン大佐。

午前5時15分，革命評議会議長ネーウィン大将の名前で，次のような声明が出された。[680]

「全国の僧侶ならびに国民の皆さん。最悪の事態にたちいたったビルマ連邦の情勢を収拾するため，ビルマ軍が責任をとったことをお知らせする。皆さんには自己の仕事を平常どおり行なっていただきたい。公務員諸氏は責任をもって日常の業務に邁進してもらいたい。特に学生諸君は，何の混乱も起こさず目下実施中の試験に専念してもらいたい。国民すべての発展向上のため，軍は任務に全力を傾ける所存である。」

クーデターについてアウンヂー準将は，3月6日の記者会見で次のように述べた。[681]

「軍が政権奪取に踏み切った理由は二つある。一つは政治的要因であり，もう一つは経済的要因である。ビルマは，政治的，経済的，宗教的困難のほかに“連邦制”という問題に直面した。中でも，クーデターを余儀なくさせた最大の原因は“連邦制”にある。[682] われわれ軍は，権力を得んとして政権をとったのではない。1958年の時には，われわれは誠意をもって政権を返還した。われわれには，二度と政権をとる意思はなかった。“連邦制”というのは微妙な問題である。ビルマは小さな国であるから，それをさらに細分するようなことがあってはならない。各州には憲法による自治権と脱退権とがある。しかし一たん離脱してしまえば，ビルマもラオスやベトナムのような状態に堕ちこんでしまうだろう。それは絶対に避けなければならない。連邦制の問題は，もはや政治家の手では解決し得ない段階にたち至った。」

ネーウィン大将は次のように述べている。[683]

「われわれが彼らを逮捕したのは，そうしなければわれわれがやろうとすることがうまくいかなかったからだ。彼らだっておとなしくはしていまい。ある人達は，われわれを暗殺しようとさえした。われわれが考えたのは，そうした企ては成功しないだろうが犠牲者は出るということだ。もしもそうなったら，われわれとしても感情的にならざるを得ない。“目には目を”ということになるのをわれわれはおそれた。彼らを過激に走らせないためには逮捕するしかなかったのだ。3月2日に逮捕したのは全く政治的な立場からだ。後

674) Than Hpe Myint, p. 2.
675) Butwell, p. 240 ; Trager, p. 198.
676) Johnstone, p. 156.
677) Hla Myo, p. 520 ; Than Hpe Myint, p. 1.
678) Htin Aung (1967), p. 327.
679) Than Hpe Myint, p. 2; Hla Myo, p. 518; Han Tin, p. 144; Trager, p. 401; Donnison, p. 163.
680) Than Hpe Myint, pp. 2-3 ; Hla Myo, p. 519 ; Han Tin, p. 143 ; Mg Mg (1969 a), p. 292.
681) 全文が *Myamma Alin*, 1962.3.8 に；英文抄訳が Butwell, pp. 240-241 にある。
682) クーデターの原因としてドンニソンは，権力闘争に明け暮れる政党政治家への不信，その政治家による社会主義政策への失望，シャン族の連邦制要求，その施行によるビルマ連邦の崩壊を挙げる。Donnison, pp. 164-165.
683) 1968年9月27日の BSPP 第3回大会におけるネーウィン演説。*Loktha Pyithu*, 1968.9.28.

からの[684]は今述べた理由による。つまりわれわれがはじめ権力をとった時には，われわれは彼らが憎かったから逮捕したのではない。個人的に言うと親しい間柄の者ばかりだった。みんなのため，国のためでなければ，われわれだってそんなことをする必要はなかった。私達はそう思っている。」

3月3日，国会が解散された。[685] 続いてシャン州，カチン州，カレン州，カヤー州の州議会が解散され，それに代わる組織として新たに軍管区司令官一人ずつを含む「州務委員会」が設置された。[686] そして3月5日，革命評議会布告第12号によって政府各省庁の責任者（閣僚）の名前が明らかにされた。[687] 新閣僚は次の8名で成りたつ。

| | |
|---|---|
| ネーウィン大将 | 首相，国防，国家計画，財務，法務 |
| アウンヂー準将 | 商務，工業，物資供給 |
| ティンペー準将 | 農林，農地国有化，協同組合 |
| タンペー準将 | 文部，厚生 |
| チョーソウ大佐 | 内務，入国管理住民登録，宗務 |
| ソーミイン大佐 | 情報，文化，公共福祉，救済，再定住 |
| バニー大佐 | 運輸通信 |
| ウー・ティーハン | 外務，住宅建設，公共事業，鉱山，復興 |

3月9日，ネーウィン大将が大統領の権限を引き継ぐことになった。[688] そして革命評議会は，立法，行政，司法の全権を評議会議長に付託する旨公示した。[689] ビルマにおける議会民主主義制度は，こうして終止符を打った。

革命政府の最初の仕事は反徒の一掃による治安の回復であった。[690] 軍は作戦を強化したが期待したような成果はあがらなかった。そこで政府は二つの手を打った。一つは大赦であり，他の一つは和平交渉である。

大赦令は63年4月1日に発表された。[691] この大赦令は従来にない大規模なもので，4月3日以降全国38の刑務所から釈放された政治犯の数は，6月10日までに4,345人にのぼった。[692] しかもこの大赦令は，7月1日までに帰順した反徒に適用される[693]ことになっていた。共産党，KNDO，シャン族反徒などの中から投降する者が続出した。けれども大赦令の効果には

684) ウー・バスエー，ウー・チョーニェイン，ボウ・ミンガウン，ウー・ローヨンなどが1963年8月9日に逮捕されている。大野　徹（1964），p. 81；Than Hpe Myint, p. 91；Donnison, p. 176.
685) *Myamma Alin*, 1962.3.4.
686) *Ibid.*, 1962.3.4, 1962.3.9；アラカン，モン両州務省は廃止された。*Ibid.*, 1962.4.29.
687) *Myamma Alin*, 1962.3.6；Han Tin, pp. 145-147.
688) Than Hpe Myint, p. 12；Htin Aung (1967), p. 327.
689) Trager, p. 199；Than Hpe Myint, p. 13.
690) Donnison, p. 165；Trager, p. 199；Mg Mg (1969 a), p. 309.
691) *Yangon*, 1963.4.2；Donnison, p. 166；Trager, p. 202；Mg Mg (1969 a), p. 309.
692) 大野　徹（1964），p. 81.
693) *Yangon*, 1963.4.2；Trager, p. 202；Donnison, p. 166.

限界がある。投降は大部分が個人単位であり，反徒の組織にはあまり影響を与えなかった。

反政府組織に対する和平交渉の呼びかけは，同年6月11日に行なわれた。[694] 政府は，反政府組織の指導者の首にかけられていた懸賞金[695]を撤回し[696]，ビルマ語，カレン語，シャン語などによるビラを3百万枚印刷して散布して反応を待った。独立以来最初の本格的な和平交渉が，こうして始まった。政府は6月からその年の年末にかけて，赤旗共産党，カレン民族連合，カチン独立軍，白旗共産党，モン新国党，カレンニー民族進歩党，シャン州革命評議会，コートゥーレー革命評議会など，あらゆる反政府組織と交渉を行なった。[697] しかしコートゥレー革命評議会との交渉成立[698]を除き，他の交渉はすべて失敗に帰した。[699] 反徒達は山に戻って行き，その活動は以前よりも激しい形で再開された。[700]

和平交渉には失敗したが，革命評議会は基本綱領を発表して新しい国造りに取り組みだした。その基本的理念は，62年4月30日に発表された「ビルマの社会主義への道」[701]の中に示されている。この基本綱領を通して，革命評議会は議会民主主義制度の否定，農民と労働者を基盤とする社会民主主義国家の建設，社会主義経済制度の確立，生産資本の国有化などを打ちだした。それは，かなり「共産主義的色彩の濃い」[702]ものであった。

この基本理念を具体化するための組織として結成されたのが，「ビルマ式社会主義綱領党」(BSPP) である。新党の創設は62年7月4日明らかにされた。[703] 同日発表された「ビルマ式社会主義綱領党創設期における党の基本綱領」（ビルマ文）によると，過渡期における党の形態は「幹部政党」であって，ビルマ革命評議会を最高機関とする「中央集権」方式によって運営される（第2条）。組織は，上部委員会，管区管理委員会，党支部に分かれ，上部委員会には党組織中央委員会，党規律委員会，社会主義経済計画委員会の3委員会が設けられる（第3条）。その中核となるのは党組織中央委で，これはさらに農民問題部，労働者問題部，大衆問題部，行政問題部，教育問題部の5部に分けられる（第4条）。[704] この上部3委員会は，原則

694) *Htoon Nezin*, 1963.6.13 ; *Myamma Alin*, 1963.6.12 ; Than Hpe Myint, p. 81 ; Donnison, p. 166 ; Mg Mg (1969 a), p. 310.
695) *Myamma Alin*, 1957.8.25, 1960.9.29, 1961.9.30.
696) *Yangon*, 1963.6.23.
697) 大野　徹 (1964), p. 82 ; Trager, p. 203 ; Donnison, p. 167.
698) *Myamma Alin*, 1964.3.13.
699) Donnison, p. 167 ; Trager, p. 203.
700) Donnison, pp. 167-168.
701) *Burma Revolutionary Council : The Burmese Way to Socialism*, Rangoon, 1962, p. 7 ; 大野　徹 (1964), pp. 83-85 にビルマ語原文よりの邦訳掲載。
702) Donnison, p. 170.
703) *Hanthawaddy*, 1963.3.3 ; *Loktha Pyithu*, 1968.4.29, 1969.4.27 ; Trager, p. 201 ; Donnison, p. 174.
704) 実際に設置されたのは1965年である。*Lanzin Thadin*, 1965.10.15 ; なお，この BSPP 本部に帰順した元反徒の幹部が集中していることは興味深い。例えば，ボウ・テインダン (PVO 赤旗)，ボウ・イェートゥッ（白旗共産党），バドウ・ワリチョー（カレン革命評議会），ウー・フラタウン（白旗共産党）など。

として革命評議会員のみで構成される（第3条第3項）ことになっており，現在次のような人達が任命されている。[705]

(1) 党組織中央委員会（9人）

ネーウィン大将（議長），ティンペー準将，サンユ準将，タンセイン大佐，チョーソウ大佐，フラハン大佐，タウンチー大佐，マウンシュエ大佐，マウンルイン大佐

(2) 党規律委員会（4人）

ネーウィン大将（議長），サンユ準将，セインウィン準将，フラハン大佐

(3) 社会主義経済計画委員会（10人）

ネーウィン大将（議長），ウー・ティーハン，ウー・バニェイン，ティンペー準将，サンユ準将，セインウィン準将，タウンティン準将，タウンチー大佐，マウンシュエ大佐，タンセイン大佐

管区管理委員会は，全国に15設置され，それぞれ各軍管区の司令官（大佐）が議長を兼任しているが，実際の運営は副議長（中佐）によって行なわれている。党支部は69年6月末現在で295支部設置されており[706]，議長は原則として現役の大尉であるが近年幹部教育を終了した非軍人が任命される傾向にある。党員は正党員，党員候補，党友の3段階に分かれ，いずれも「ビルマ式社会主義」の理解者，支持者であること[707]が必須条件である。1969年現在の入党申請者数985,519人の内，257,463人は党員候補，728,056人は党友であって[708]，正党員はまだきわめて少ない。（その後党員候補の格上げが行なわれ1971年現在党員数55,467名に急増している。）

この62年に発表された「過渡期」の綱領から7年たった1969年11月6日，第4回党大会の席上で新しい綱領が明らかにされた。[709] それによると，社会民主主義実現に必要な基本的建設活動が完了したので，現在の“中央集権”的形態の党を全人民による「人民党」に改組する意向[710]と言う。革命評議会はこの党の育成充実に力を注いでおり，革命評議会1964年布告第4号によってこの党を除く既成政党のすべてが解散させられた。[711] なお，党の下部機関として1966年3月には「人民農民評議会」（議長タウンチー大佐）が，1968年4月には「人民労働者評議会」（議長マウンシュエ大佐）が，それぞれ結成されている。[712]

705) Hla Myo, p. 522 ; Than Hpe Myint, p. 41 ;『アジアの動向（ビルマ）』1967, p. 208.
706) *Shai-thoe*, 1969.6.15 ; *Loktha Pyithu*, 1969.11.9.
707) 第12条第1項（1）。
708) 1969年党大会における書記長報告，*Loktha Pyithu*, 1969.11.9. 正党員の数は1965年20名，1970年7月859名。
709) 全文が *Loktha Pyithu*, 1969.11.8 に掲載されている。
710) *Loktha Pyithu*, 1969.11.8.
711) Than Hpe Myint, p. 133 ; Donnison, p. 177.
712) *Loktha Pyithu*, 1968.5.29, 1970.4.20. 中央農民評議会員は606人，中央労働者評議会員は530人である。

革命評議会は，こうして国民の団結を図る一方，国民生活と関係の深い地方行政機構にも改革のメスを入れた。ビルマが英領インドに編入された1886年以来，その地方行政は次のようになっていた。[713]

| 行政単位 | | 担当官吏 |
|---|---|---|
| Division | ——— | Commissioner |
| ↑ District | ——— | ↑ Deputy Commissioner |
| ↑ Sub-division | ——— | ↑ Sub-divisional officer |
| ↑ Township | ——— | ↑ Township officer |

この形態は独立後も基本的には変わらず，旧 Indian Civil Service に相当するエリート官吏が Township officer, Sub-divisional officer, Deputy Commissioner, Commissioner というピラミッド型の機構を構成していた。[714] 革命評議会はこれらの地方行政官吏を「治安行政委員会」(SAC) に吸収して[715]，軍人が実権を握るようにした。治安行政委員会は，「社会民主主義国家が成立するまでの過渡期における革命的業務を担当する」[716] 機関で，「権力が特定の官吏に集中する古い行政機構を改組し，革命権力を代表して運営を行なう」[717] 組織として62年5月9日に創設された。[718] しかるに時の推移とともに SAC は，「行政，司法権を行使し，政府の手足となってその政策の実施に当たるという全能者的権限をもつ」[719] ようになってきた。軍人による地方行政機構の支配[720] が確立されたわけである。1967年から1970年までのビルマ字日刊紙の記事を整理して作成した筆者の資料から言うと，各段階における SAC の議長は，村落 SAC の場合を除いてすべて将校である。まず最高段階の中央 SAC は革命評議会議長府に直属し，内務大臣チョーソウ大佐が議長を兼任している。下部機構の管区，県，郡の各 SAC でも，佐官，尉官クラスの将校が議長を務めている。SAC の構成は軍1，警察2，文官3の割合[721] で，管区長官，県知事，郡長などの内務官吏は今でも制度上残されている[722] けれども，いずれもそれぞれ管区，県，郡各 SAC の議長代理として機能しているにすぎない。これを図示すると次のようになる。

---

713) Furnivall, p. 39, 71 ; Tinker, p. 130 ; Donnison, pp. 79-80.
714) Mg Mg (1961), p. 136 ; もっとも1953年以降 Village, Township, District ごとに評議会が設けられた。*Burma : The Eleventh Anniversary*, 1959.
715) Donnison, p. 178.
716) *Loktha Pyithu*, 1968.5.9.
717) *Loktha Pyithu*, 1970.7.12.
718) *Ibid.*, 1968.5.9.
719) 在ビルマ日本国大使館編「ビルマ事情」1967，p. 8.
720) Donnison, p. 179, 181.
721) 内務官僚のほかに農林省，協同組合省の役人が加わる。*Bo Tahtaung*, 1962.11.25.
722) 筆者の資料によれば，1970年8月現在，管区長官は11人，県知事47人，郡長311人が任命されている。

| 名　称 | 議　長 | 副議長 |
|---|---|---|
| 中央治安行政委員会 | 内務大臣（チョーソウ大佐） | マウンチョー大佐（後チーマウン大佐） |
| 管区治安行政委員会 | 大　佐（軍管区司令官），または中佐 | 管区長官 |
| 県治安行政委員会 | 中　佐（大隊長），または少佐 | 県知事 |
| 郡治安行政委員会 | 大　尉 | 郡長 |

革命評議会は，将来このSACに人民労働者評議会，人民農民評議会の代表を加え，「人民評議会」に改組する意向をもっている。[723] SACは，いわば人民行政機関としての「人民評議会」の前身として性格づけられている。

1966年10月27日，ウー・ヌとウー・バスエーの両名が釈放され[724]，タキン・ターキン，タキン・チッマウンらの政党政治家，シャン州政治家62人も68年11月21日には釈放された。[725] 68年11月29日，ネーウィン将軍は釈放されたこれら元政治家33人を招いて，ビルマの将来を検討する「国内統一諮問委員会」を設置した。[726] 委員会の答申は69年6月2日に提出された。[727] 答申は，(1)民主社会主義路線（22人），(2)社会民主主義路線（11人）およびウー・ヌ私案の3案に分かれている。名称はどうあれ，それはいずれもクーデター前のAFPFL, NUFの政治的見解をそのまま再現したものであった。革命評議会は，そのいずれの案も採択しなかった。革命評議会の「ビルマ式社会主義」路線は，今ではしっかりと根を張っている。

（5）軍の権力構造と軍組織の現状

ビルマの権力は，現在そのいっさいが「革命評議会」に集中している。革命政府も軍も，革命評議会配下の一つの組織にすぎない。その革命評議会の中で，最高の権力を掌握しているのがネーウィン大将である。従ってビルマの権力構造は，このネーウィン大将を頂点とする次のような形を成していると言ってよい。

ネーウィン大将→革命評議会—→革命政府—→治安行政委員会→国民
ネーウィン大将→革命評議会—→陸海空軍—→治安行政委員会→国民
ネーウィン大将→革命評議会—→ビルマ式社会主義計画党—→人民農民評議会→国民
ネーウィン大将→革命評議会—→ビルマ式社会主義計画党—→人民労働者評議会→国民

ネーウィンに次ぐ権力機関が革命評議会であることは言うまでもないが，評議会それ自体は

723) *Loktha Pyithu*, 1970.1.30.
724) *Ibid.*, 1966.10.28,（なお，ウー・ヌはボウ・レッヤー，ボウ・ヤンナイン，ウー・ローヨン，クリフト元準将等と共に，バンコク亡命中），1969.12.20.
725) *Ibid.*, 1968.11.22.
726) *Ibid.*, 1968.11.30, 1968.12.5.
727) 詳細は *Loktha Pyithu*, 1969.6.3, 1969.6.4 に掲載されている。要約すると，ウー・ヌ案は，政権の即時返還，議会民主主義制度の復活，新憲法起草，総選挙の実施を骨子とする。民主社会主義案は旧連邦党とAFPFLとの合同案で，議会民主主義を基盤とする。社会民主主義案は，旧NUFの見解である。

複数の高級将校からなる合議体である。従ってその内部における会員一人一人の順位をどう見るかという問題が残る。以下は，1970年8月現在における革命評議会員の位置を示したものである。(軍務を離れた者は，その最終身分をカッコ内に示す)

| | 革命政府役職 | 軍隊内序列 | BSPP 役職 |
|---|---|---|---|
| ネーウィン大将 | 首相，国防 | 参謀総長 | 党組織中央委，党規律委，社会主義経済計画委各議長 |
| ティンペー準将 | 救済，再定住，国民団結，公共福祉 | (兵站局長) | 組織中央委副議長，社会主義経済計画委員 |
| サンユ準将 | 大蔵，国家計画 | 陸軍参謀次長 | 組織中央委書記長，規律委副議長，社会主義経済計画委員 |
| セインウィン準将 | 公共事業，住宅建設 | (中央軍管区司令官) | 紀律委員，社会主義経済計画委員 |
| タウンティン準将 | 鉱山 | 海軍参謀次長 | 社会主義経済計画委員 |
| タウンダン準将 | 文化，情報 | 空軍参謀次長 | ―――― |
| チョーソウ大佐 | 内務，入国管理，国民登録，民主地方行政，宗務 | (軍監察総監) | 組織中央委員 |
| タンセイン大佐 | 法務，運輸通信 | (バトウー士官学校長) | 組織中央委書記次長，社会主義経済計画委員 |
| タウンチー大佐 | 農林，農地国有化 | (南東軍管区司令官) | 組織中央委員，社会主義経済計画委員 |
| マウンシュエ大佐 | 工業，労働 | (東部軍管区司令官) | 組織中央委員，社会主義経済計画委員 |
| フラハン大佐 | 文部，厚生，外務 | (軍医総監) | 組織中央委員，紀律委員 |
| マウンルイン大佐 | 通産，協同組合 | (駐日武官) | 組織中央委員 |
| タンユサイン大佐 | (通産公社第22号) | (駐米武官) | ―――― |
| ティンウー大佐 | ―――― | 中央軍管区司令官 | ―――― |

以上から，革命政府役職を1，BSPP 役職を3，合計4で各人の兼職数を算出してみると次のようになる。

4―ネーウィン大将，サンユ準将

3―ティンペー準将，タンセイン大佐，タウンチー大佐，マウンシュエ大佐，セインウイン準将，フラハン大佐

2―チョーソウ大佐，マウンルイン大佐，タウンティン準将

1―タウンダン準将

0―タンユサイン大佐，ティンウー大佐

もちろん，きわめて機械的に導出した数字であり，これがそのまま革命評議会内部の序列を

表わしているとは言えないけれども，ほぼ実体に近いのではないかと思われる。[728] ティンペー，タンセインの次にタウンチーとマウンシュエをもって来たのは，二人がそれぞれ「人民農民評議会」「人民労働者評議会」の議長を兼ねているからであり，チョーソウをマウンルイン，タウンティンの前においたのは彼が「中央治安行政委員会」の議長を兼ねているからである。また，大佐のマウンルインを準将のタウンティンの前においたのも，彼がビルマ式社会主義綱領党の幹部養成機関である「中央政治学校」の校長を兼ねているからにほかならない。

これら14人の革命評議会員に共通した特徴は，タンユサインを除いて，(1)BIA または BDA 時代に入隊している，(2)反日レジスタンス戦に参加している，(3)独立後，対 KNDO 戦，共産党討伐作戦，残存国府軍討伐作戦のいずれかで武勲を挙げていることである。これに，強いて加えるとすれば，第二次大戦後編成された新ビルマ国軍当時，ネーウィン大佐が大隊長を務めていた第4大隊の隊員であった者が3人（ティンペー，チョーソウ，タンセイン。これに61年2月の異動で大使にとばされた[729]元準将マウンマウン，63年2月に解任された[730]元準将アウンチーの両名が加えられる），ミンガラードン士官学校の出身者が5名—チョーソウ（Ⅰ期），マウンシュエ（Ⅰ期），タウンダン（Ⅱ期），ティンウー（Ⅲ期），タンセイン（Ⅲ期）。これに解職された元革命評議会員の元大佐チーマウン（Ⅰ期），元大佐チッミャイン（Ⅰ期），元大佐ソーミイン（Ⅰ期），1961年に大使でとばされた[731]元準将アウンシュエ（Ⅰ期）などを加えてもよい—などに革命評議会の性格が現われているかも知れない。（パイは閨閥の存在も指摘している。）

ビルマ国軍は，革命評議会の下，1970年8月現在次のような構成をなしている。（カッコ内の数字は，ミンガラードン士官学校の出身期を表わす。）

| | | |
|---|---|---|
| 国防省 | 国防大臣 | ネーウィン大将 |
| | 軍務局長 | マウンマウンチョーウィン準将 |
| | 軍務副局長 | ミインアウン中佐（Ⅲ期） |
| | 軍務副局長補 | バキン中佐，マウンマウン中佐 |
| | 連絡局長 | トゥンミイン大佐 |

728) ネーウィンを別とすれば，革命評議会の会員である以上13人の高級将校を，A級にランクづけることができる。そしてB級を構成するのが革命政府各省の副大臣や次官に任命されている大佐，それに国防省および参謀本部の準将，大佐達であろう。軍管区の司令官や師団長，旅団長はその下にくる。それに準じるのが BSPP の管区副議長達であろう。なお，各国駐在の大使は元準将，元大佐が少なくないが，「冷飯」組とみなすことができる。なお，ティンペー準将は70年11月14日，タンユサイン大佐は同年10月26日にそれぞれ解任された。*Loktha Pyithu*, 1970.10.27, 1970.11.15.

729) *Myamma Alin*, 1961.2.7 ; *Mandaing*, 1961.2.7. マウンマウン，アウンシュエ両準将が大使に，エーマウン，テインドウ，トゥンセイン，セインミャ，フラモーの5大佐が駐在武官になった。

730) *Myamma Alin*, 1963.2.10. アウンチー解任の直接原因は，賠償協定再交渉で来日中に語った「軍政の早期打切り，政党政府への政権の譲渡」（Than Hpe Myint, p. 66）にある。軍政への批判者だったことが命取りになった。なお，アウンチーは1944年当時最も活動的な「人民革命党」（後の社会党）の党員でもあった。Tin Mya, vol. 5, pp. 81-83.

731) *Mandaing*, 1961.2.7 ; *Myamma Alin*, 1961.2.7.

| | | |
|---|---|---|
| | 連絡副局長 | テインマウン大佐（1970年10月11日付で駐中共大使に転出） |
| | 連絡副局長補 | ソウミインウィン中佐 |
| | 補給輸送局長 | キンマウンレー大佐 |
| | 兵器局長 | フラスエー大佐 |
| | 情報局長 | チッキン大佐（II期） |
| | 監察総監 | ミンテイン大佐（I期） |
| | 教育総監 | トゥンティン大佐（III期） |
| | 教育副総監 | セイントウン中佐（幼年II期） |
| | 医務総監 | マウンチョー大佐 |
| 参謀本部 | 参謀総長 | ネーウィン大将 |
| | 陸軍参謀次長 | サンユ準将 |
| | 高級参謀 | チーマウン大佐（III期）（中央 SAC 副議長就任） |
| | 〃 | フラトゥン中佐 |
| | 海軍参謀次長 | タウンティン準将 |
| | 高級参謀 | チゥコウコウ大佐（1971年1月15日駐日大使に転出） |
| | 〃 | ビー・オー・バーバー大佐 |
| | 〃 | キンウー中佐 |
| | 空軍参謀次長 | タウンダン準将（II期） |
| | 高級参謀 | マウンマウンシン大佐 |
| | 〃 | ソーピュー中佐 |
| | 〃 | ウインミイン中佐 |

ラングーン管区軍司令部（ラングーン）

| | |
|---|---|
| 軍司令官 | チョーティン大佐 |
| 副司令官 | キンアウン中佐 |
| 参謀長 | |
| 作戦参謀 | ティンウー中佐，アウンウィン中佐，フラペー中佐 |

中央軍管区司令部（ミンガラードン）

| | |
|---|---|
| 軍司令官 | ティンウー大佐（III期） |
| 副司令官 | ペーアウン大佐，ソウフライン中佐 |
| 参謀長 | トゥンティン大佐 |
| 作戦参謀 | レッチーマンヤイン中佐，ティンテイン中佐（II期），ウィンマウン中佐 |

南東軍管区司令部（モールメン）

司　令　官　ティンスエー大佐（II期）

副司令官　テイングエー大佐(V期)，フラティン中佐，ミンチー中佐，ソウミイン中佐

参　謀　長　キンマウンタウン中佐（II期）

作戦参謀　ティーラ中佐，バトゥエー中佐(II期)，キンチョーニョウ中佐

南西軍管区司令部（バテイン）

司　令　官　サンチー大佐（III期）

副司令官　キンザーモン大佐，アウンブイン大佐（III期）

参　謀　長　チョーカイン大佐（V期）

作戦参謀　チョーウイン中佐，シティンウィンニョウ中佐

東部軍管区司令部（タウンヂー）

軍司令官　タンティン大佐

副司令官　アウンキン大佐，フラトゥン大佐(幼年I期)，トゥンイー大佐

参　謀　長　ティンミャッ大佐

作戦参謀　ティンニュン中佐，ソウテイン中佐，テイントゥン中佐，セインマウン中佐

西北軍管区司令部（マンダレー）

軍司令官　セインルイン大佐（III期）

副司令官　バンクール大佐，タンニュン大佐（II期），ミンカウン中佐

参　謀　長　オンチー大佐

作戦参謀　バルイン中佐，テイントウン中佐，テインマウン中佐

歩兵第77師団（フモービー）

師　団　長　ピー・トゥンシェイン大佐（II期）

副師団長　オンチョー大佐（V期），ヤンナウンソウ中佐

作戦参謀　アウンキン大佐，バンクール大佐，トゥンイー大佐（3人とも兼任）

歩兵第88師団（マグエー）

師　団　長　エーコウ大佐

副師団長　チョーミイン中佐，ティンニュン中佐，ミョウナウン中佐，ソウミインアウン中佐（幼年I期）

作戦参謀　フラトゥン大佐（兼任）

歩兵第99師団（メイティーラー）

師　団　長　キンオン大佐（IV期）

副師団長　コウコウレー大佐，ティンセイン中佐

歩兵第7旅団（ミッチーナー）

旅　団　長　タンセイン大佐

歩兵第11旅団（パアン）

旅　団　長　サンミャシュエ中佐

歩兵大隊

陸軍には，以上6軍管区，3個師団，2個旅団の下に，第1から第99までの番号を付けた歩兵大隊がある。この内，60，70，80各代の大隊はまだ完全には整備されていない。従って歩兵大隊の実数は約80前後。それ以外に，1から6までの番号を付けたビルマ小銃大隊が6個大隊，101から109までの番号を付けた軽歩兵大隊が9個大隊，カチン小銃大隊5個大隊，チン小銃大隊4個大隊，カヤー小銃大隊，シャン小銃大隊が各1個大隊ずつある。以上が陸軍の戦闘部隊である。なお，歩兵1個大隊は4個中隊，1個中隊は9個小隊，1個小隊は兵士10人から成るが，1個大隊の兵力は，普通500ないし600名である。

その他の部隊

歩兵以外の部隊としては，大砲部隊が中央，第1，第2，第3，第4の各大隊，戦車隊が第1，第2の2大隊，通信部隊が中央，第1，第111，第212，第313，第414，第515の7個大隊，輜重部隊が第121，第222，第323，第424，第525の5個大隊，野戦病院隊が中央，第131，第232，第333，第434，第535の6個大隊ある。そのほか，工兵隊や訓練部隊などもある。なお，陸軍各部隊の大隊長は原則として少佐であるが，中佐（新任組）の大隊長もかなりいる。

海軍は7艦隊で編成されており，それぞれ次の港に基地をおいている。

(1) イラワジ海軍基地

司令官　ニュンアウン中佐

参　謀　タンミイン少佐

(2) テナセリム海軍基地

司令官　エフ・ピーター中佐

参　謀　タンニュン少佐

(3) アラカン海軍基地

司令官　サンリン中佐

アキャブ基地司令　チョーマウン少佐

バテイン基地司令　マウンスエー少佐

修理艦艦長　ティンミイン少佐

(4)　ヤダナーボン海軍基地

司令官　キンマウンミイン中佐（測量部隊長兼任）

(5)　海軍士官学校

校　長　チッフライン中佐

副校長　マウンマウンヂー中佐

(6)　護衛艦隊

メーユ号艦長　キンマウンチョウ中佐（連合艦隊司令官兼任）

(7)　海軍造船所

所　長　テインハン少佐

空軍は戦闘基地を3か所，訓練基地を1か所もっている。基地司令官はすべて中佐である。

第501空軍基地（フモービー）

司令官　ミインウィン中佐

第502空軍基地（ミンガラードン）

司令官　コウヂー中佐，副司令官　アウンキン中佐

第503空軍基地（メイテーラー）

司令官　ティンニュン中佐

シャンテー空軍基地

司令官　ティンマウンチー中佐

メイテーラー訓練基地

司令官　ソウフライン中佐（II期），副司令官　ティンマウンエー中佐

空軍整備隊

隊　長　ティンアウン中佐

空軍保修隊

隊　長　ティンマウン中佐

士官学校は，メイミョウ，フモービー，バトゥーの3か所に設置されている。

メイミョウ士官学校

校　長　トゥンアウンヂョー大佐（I期）

フモービー士官学校

校　長　アウントゥン中佐

バトゥー参謀学校

校　長　セインシュエ中佐

バトゥー下士官学校

校　長　マウンタウン中佐（II期）

〔付記〕 国軍組織の現状については，もっぱらビルマ語日刊紙（1967年5月～1970年8月）の断片的な報道記事を基に組み立てた。従って不備な点があるし，誤りもあるかも知れない。なお，1970年8月以降の人事異動についても可能な限り修正を施したが，革命評議会員（ティンペー準将，タンユサイン大佐ら）の解任についてはそのままとした。

## 参考文献


（英　文）

Butwell, Richard. 1963. *U Nu of Burma*, Stanford U. P.

Cady, John F. 1958. *A History of Modern Burma*, Cornell U. P.

Collis, Maurice. 1956. *Last and First in Burma*, London.

Desai. 1961. *A Pageant of Burmese History*, Calcutta.

Director of Information, Govt. of the Union of Burma. 1959. *Burma: The Eleventh Anniversary*, Rangoon.

Director of Information, Govt. of the Union of Burma. 1960. *Is Trust Vindicated*? Rangoon.

Donnison, F. S. V. 1970. *Burma*, London.

Foucar, E. C. V. 1956. *I Lived in Burma*, London.

Furnivall, J. S. 1956. *Colonial Policy and Practice*. New York U. P.

Govt. of the Union of Burma. 1949. *Burma and the Insurrections*, Rangoon.

Htin Aung. 1965. *The Striken Peacock*, The Hague.

Htin Aung. 1967. *A History of Burma*, Columbia U. P.

Johnstone, William C. 1963. *Burma's Foreign Policy*, Cambridge, Mass.

Maung Maung. 1958. *Burma in the Family of Nations*, Amsterdam.

———. 1961. *Burma's Constitution*, The Hague.

———. 1969 a. *Burma and General Ne Win*, Bombay.

Ministry of Information, Govt. of the Union of Burma. 1953. *Kuomintang Aggression in Burma*, Rangoon.

Pye, Lucian W. 1962. *The Army in Burmese Politics*. (in Johnson J. J.), Princeton U. P.

Tinker, Hugh. 1961. *The Union of Burma*, Oxford U. P.

Trager, Frank N. 1966. *Burma from Kingdom to Republic*, New York.

（ビルマ文）

Bo Htun Hla. 1955. *Bogyok Aungsan*, Amsterdam.

Bo Kyaw Zaw. 1961. *Amyotha Lutmyaukye Taikpwemya*, Rangoon.

Bo Than Daing. 1967. *Lutlatye Ayedawbon Hmattan*, Vol. I, II, Rangoon.

Bo Thein Swe. 1967. *Lutlatye Taikpwe*, Rangoon.

Hla Myo, Yebaw. 1968. *Pyihtanugzu Myanma naingan Thamainwin Sagyoksadanmya*, Rangoon.
Maung Maung. 1968. *Naingandaw Loukkyanhmu*, Rangoon.
———. 1969 b. *Myanma Nainganye Hkayi hnit Bogyok Ne Win*, Rangoon.
Maung Soe Maung. 1955. *Wungyigyok U Nu*, Amsterdam.
Han Tin, Sagain. 1964. *Lonwa Lutlatye tho*, Rangoon.
Than Hpe Myint. 1968. *62-67 Thamain Win Hmattanmya*, Rangoon.
U Hla, Ludu. 1957. *Htaung hnit Lutha*, Mandalay.

（ビルマ字新聞）
Bama Khit Thadinza, Bo Tahtaung Thadinza, Hanthawaddy Thadinza, Htoon Nezin Thadinza, Loktha Pyithu Nezin Thadinza, Mandaing Thadinza, Myamma Alin Thadinza, Thuriya Thadinza, Yangon Thadinza, Thamadi Thadinza, Thissa Nezin.

（邦　文）
在ビルマ日本国大使館編. 1967.『ビルマ事情』.
矢野　暢. 1968.『タイ・ビルマ現代政治史研究』京都大学東南アジア研究センター.
大野　徹. 1964.「ビルマの社会主義への道—邦訳ならびに解説—」『東南アジア研究』1巻3号.
———. 1967.「アウンサン将軍（II）」『鹿大史学』第15号.
———. 1969 a.「北ビルマ（カチン州）の旅」『鹿児島大学史録』第2号.
———. 1969 b.「ビルマにおけるカレン民族の独立闘争史 I，II」『東南アジア研究』7巻3号，4号（1970）.